

# メタファーと有標性

藤 本 滋 之

西南学院大学学術研究所  
英語英文学論集  
第59巻第3号抜刷  
2019（平成31）年2月

# メタファーと有標性

藤 本 滋 之

## 0. はじめに

Lakoff and Johnson (1980)、Lakoff (1987)、Sweetser (1990) 等により、メタファーは特別な修辞技巧なのではなく、無意識のうちに言語の中に広く組み込まれていて、メタファー無しに言語を使うことは不可能であるという考え方が一般に認められて来た。メタファーは、「ある事物や概念を記述するのに使われる語句を、何らかの相通じる類似性に基づき、他の事物や概念を記述するのに用いる比喩 (figure of speech)」(Merriam-Webster Online Dictionary)、「ある事物や行為を記述するのに、文字通りには適用できない語句を適用する比喩 (figure of speech)」(Oxford Dictionary of English) である。たとえば「金に溺れる (drown in money)」というとき、「溺れる」のは本来「水」の中でなければ不可能であるが、「溺れる」状況における「水」に覆われて抜け出せないイメージを、文字通りには適用できないはずの「金」に適用し、いかに多くの金に包まれ抜け出せない状況にあるかを表しているのである。

本稿では、メタファーに伴う大きな特徴として、斎藤 (1983) で提案されている「有標性」の概念を、状態変化と位置変化 (つまり移動) と行為の三つの場合に分けて考察し、いずれも無標から有標に変化する際にメタファーが生まれることを論じる。1 節では状態変化、2 節では位置変化、3 節では行為という人の動きの変化に伴って生じるメタファーを分析する。

## 1. 状態変化のメタファー

本節では、状態が変化する状況でメタファーが成立する条件を考察する。英語と日本語のメタファーを比較することにより、メタファー成立の要件として

「有標性 (markedness)」がかかわっていることを提案したのは斎藤 (1983) である。

- (1) a. 彼はやくざの世界から {\*手 / 足} を洗った。  
 b. そんな仕事から早く {\*手 / 足} を洗うべきだ。
- (2) a. He *washed his* { *hands* / *\*feet* } of that job.  
 b. After giving her two warnings, he *washed his* { *hands* / *\*feet* } of the consequences.  
 c. The civil authorities *washed their* { *hands* / *\*feet* } of the whole matter.

(1)の例が示すように、日本語では「足を洗う」はメタファーになるが「手を洗う」はメタファーにならない。逆に、英語では wash one's hands はメタファーになるが wash one's feet はメタファーにならない。<sup>1</sup>この対照を、斎藤 (1983) は「有標性 (markedness)」という、音韻論で最初に用いられた概念を用いて説明している。すなわち、日本語の文化では、普段手はきれいなもの、足は汚いものとして捉えられている。したがって、手は洗っても普段の状態に変化はないが、足は洗うときれいな特別な状態、つまり有標な状態に変わる。このときメタファーが生まれるというわけである。他方、英語の文化では、普段手は汚く足はきれいなものとして捉えられているから、手は洗うときれいな特別な状態に移行するが、もともときれいな足は洗っても変化がない。したがって、手を洗うとメタファーになるが、足は洗ってもメタファーにならない。<sup>2</sup>

<sup>1</sup> wash one's hands は聖書に登場する：When Pilate saw that he could gain nothing, but that rather a tumult was made, he took water, and *washed his hands* before the multitude, saying, I am innocent of the blood of this just person: see you to it. (*Matthew 27:24*) この phrase が聖書を起源とするのか、それ以前から存在したのかは特定できていない。

<sup>2</sup> 「手を引く」なら日本語でも「手」が使える。たとえば(2c)は「市当局は、その件から完全に手を引いた」のように「手」を使って表現できる。しかしながら、これはメタファーではなく、当該の状況で中心的な位置を占める一部のもので全体を代表する synecdoche と言える。ある問題に関わる時に使うのは頭や体であり、手は目に見えて

次のような成句に見られる日英間の対照も、手と足の通常の状態に対する日英の考え方の違いを示唆している。これも斎藤（1983）が取り上げている例である。

- (3) a. with clean hands  
 b. \*きれいな手で  
 c. 汚い手を使わないで

英語では手は通常の状態では汚いと考えられているから「きれいな手」はメタファーになる。他方、日本語では手はきれいなものと考えられているため、「きれいな手」ではメタファーにならない。したがって、(3a)を日本語に翻訳するときは「汚い手」を使わなければならなくなる。

以上の議論が正しいとすれば、「洗う」とは逆に「汚す」場合、日本語では「手」でメタファーが生じ、英語では foot でメタファーが生じることを予測するが、次の例は、その予測が正しいことを示している。

- (4) a. 彼は不正な金銭の授受に {手/\*足} を汚した。  
 b. 彼女はどのようにドラッグに {手/\*足} を染めることになったのだろうか。  
 (「英辞郎」 <<https://eowp.alc.co.jp>>)
- (5) get one's { \*hands / feet } wet: to start a new activity or job  
 (The Free Dictionary <<http://www.thefreedictionary.com/>>)
- (6) a. The only way to learn is jump in and *get your feet wet*.  
 (習得の唯一の方法は、その世界にとびこんでやってみることだ。)  
 b. *get one's feet wet* in the computer world  
 (コンピューターの世界に足を踏み入れる)  
 c. We're just *getting our feet wet*. (まだ取りかかったばかりだ。)  
 (「英辞郎」 <<https://eowp.alc.co.jp>>)

---

その中心的な役割を果たす部分であり、メタファーに存在するようなイメージの他の世界への転用は存在しないと考えるよいであろう。

日本語では(4)に示すように、手は汚すのはもちろん、染めてもメタファーが成立する。他方英語では、(5)に示すように「足を濡らす」が「ことを始める」の意味の成句になっており、(6)に示すように、悪いことに限らず一般に何かを始める意味で使える。英語の文化では、足は汚すどころか、濡らしても異常な、つまり有標な状態と見なされることがわかる。

以上の議論をまとめて表にすると次のようになる。

(7) 手・足の状態変化とメタファー成立の関係

	無標の状態	洗う	メタファー	汚す	メタファー
手	きれい	きれい	×	汚い	○
足	汚い	きれい	○	汚い	×
hands	汚い	きれい	○	汚い	×
feet	きれい	きれい	×	汚い	○

日本語では普段の、つまり無標の状態で「手」はきれい、「足」は汚いと考えられている。「洗う」と手に変化はないが、足はきれいな特別な(有標な)状態に変化するのでメタファーが生じる。これに対し、「汚す」と手はきれいな状態から汚い特別な状態に変化する所以メタファーが生じるが、もともと汚い足には変化がないのでメタファーは生じない。他方、英語では、普段の状態で hands は汚い、feet はきれいと考えられているので、「洗う」と hands は特別な状態に移行しメタファーが生じるが、もともときれいな足には変化がなくメタファーは生じない。これに対し、「汚す」と hands に変化はないが、feet は汚れた特別な状態に移行するのでメタファーが生まれることになる。

以上は言語データに基づく議論であるが、文化人類学的な証拠を挙げておこう。斎藤(1983)が指摘するように、食卓にハンドバッグを置くことに抵抗を感じるのは、日本語の文化より英語の文化の人に多い。ハンドバッグは手で触れるものであるから、「汚れた」手で触るハンドバッグも汚れたものと見なされる。フランス文化でも同様のようで、留学生対象の日本語の授業で、見るからに新しい真っ白なバッグを教室の床に置いている学生がいたのを見て、良い証

抛を見つけたと喜びながら筆者は「机の上に置いたら」と促したが、その学生は「どうして?」というような顔をしてハンドバッグを床に置いたままであった。

これも斎藤(1983)が指摘するところであるが、西洋の文化においては、手袋を外しざまにする握手が最も礼儀正しいとされる。手袋をしていれば手はきれいな状態に保たれているが、空気に触れた瞬間汚れるという感覚があるからと推理できる。手袋をはずした瞬間にする握手は「汚れのない真新しいきれいな手」でする握手ということになる。

他方、足は、常に空気に触れている手とは違い、寝るとき以外は靴と靴下で覆われている。西洋人は寝る時以外に靴を脱ぐことに抵抗を感じるのであろう。京都の寺院の中には「靴袋」を用意しているところがある。その袋は脱いだ靴を入れるのではなく、履いた靴を覆う袋なのである。これに対し、日本人の足は、長い間泥にまみれてきた。1960年代まで、日本の人口の半数は農村に居住し、就業人口の3割が農業だった。農業の中心は言うまでもなく水田稲作であった。筆者の母の実家は、60年代まで家の半分が土間であった。玄関を入ると、農作業の道具や収穫物をしまっておくエリアがあり、奥に進むと広い台所があり、井戸の周辺には足を洗えるスペースがあった。玄関から奥の台所まで、農作業で汚れた足のまま歩き、奥で足を洗いやつと畳の部屋に上がるのであるが、畳の位置がひじょうに高く、子どもが上がるのには辛いほどであった。上がり口には大きな布が置いてあり、それで足をよく拭いて上がらなければ父母や祖父母に叱られたものである。それほど、日本人にとって足は汚れているものだったのである。

足は汚れているものと考えてきた日本文化ではあるが、まったく何も履いていない状態を普通と考えてきたわけでもない。足袋は奈良時代から存在し、大正時代以降は地下足袋を履いて農作業に従事した。「裸足」は、足袋さえ履いていない、そのままでは仕事にならない特別な状態を言う。「裸」はもともと体全体の状態を記述するものであるから、足は体の一部とはいえ、本来は裸の対象ではない。したがって「裸足」における「裸」も有標性に基づくメタファーであると言える。「裸眼」における「裸」も同様にメタファーであり、そのままでは

日常生活に困る異常な状態を言う。普通の正常な（無標な）状態を保つにはメガネやコンタクトレンズが必要になる。<sup>3</sup>「裸電球」もメタファーである。通常の生活において傘も何もなく電球だけで灯りとして使うことは極めてまれであり、異常な状態と見なされる。

他方、足をきれいなものと考えてきた英語の文化では、裸足は日本語の文化におけるよりもさらに異常な状態であると予測される。「裸足」に相当する英語を bare feet と記載する辞典が多いが naked feet という表現もある。naked は元々衣服を身に付けていない状態を表し、それを身体以外にも適用するメタファーの用法があるので「裸」と同様である。

- (8) a. a naked floor (荒床：畳やフローリングの下地になる床)  
 b. a naked wall (家具・装飾などが何も置かれていない壁)  
 c. a naked light bulb (裸電球)

(「英辞郎」 <<https://eowp.alc.co.jp>>)

上記の例はいずれも、naked がそのままでは放置できない異常な状態を表すことを示唆している。したがって、naked feet は放置できない異常な足の状態を指し、bare feet よりもさらに異常で放置すべきでない状態を指すことになる。したがって、“walk with naked feet” と言えるような状況はひじょうに稀であり、「裸足で歩く」に対応する英語は walk barefoot とするのが普通ということになる。日本語にも「裸足」と「素足」の区別はあるものの、「裸足で歩く」と「素足で歩く」との間にはそれほど大きな差は感じられない。<sup>4</sup>したがって、異常と見なす度合つまり有標性の程度において、naked feet のほうが「裸足」よ

<sup>3</sup>「裸眼」は、そのままでは見るのに困るが、「肉眼」はそのままでもとりあえず間に合う。「裸眼」と「肉眼」の関係は、後述する「裸足」と「素足」の関係に似ていると言える。

<sup>4</sup>「素手」も bare hands が普通であるが naked hands もある。他方「裸手」はない。手は足に比べて覆うものがなくて困る頻度、程度が低いためと考えられる。他方、英語では日本語におけるよりも手は覆う可能性が高く、覆われていないことの異常さを表現する必要性も高いためと考えられる。

りも高いと考えてよいと言える。

ここで問題にしている「有標性」は相対的なものである。放置するわけには行かない困った異常な状態と考えるか否かは、その場の状況との関係で決まる。次の例は、衣服の有無といえども相対化されることを示している (cf. 藤本 1990)。

- (9) I would walk over to the far corner, cold and *naked* now in my cotton pyjamas, .... (Roald Dahl, *Galloping Foxley*)

上の例で主語の I は *naked* の状態でありながらパジャマを着ている。(9)の文の前には(10)のような一節がある。

- (10) *Always keep the dressing-gown on and take the extra strokes.* (*ibid.*)

(10)は、(9)にある *naked* に対立する状態が、単に衣服を着ている状態ではなく、パジャマの上にガウンを羽織っている状態であることを示している。(9)の *naked* は、日本語でいえば「(ガウンを脱ぎ) パジャマだけの姿になって」ということであり、パジャマだけの姿は「裸」も同然と言ってよいほど異常な困った状態と言える寒冷地のようすを表していることになる。

日本語の「裸」と比較して、英語の *naked* は形容できるものの範囲が広い。つまり、本来「衣服を身に付けていない」状態を表す *naked* は、メタファーとして用いられる範囲が「裸」よりも広い。上記(9)の例は、その理由を示唆しているように思われる。つまり、「裸」に比べ *naked* は相対的で範囲が広い。言い換えると、「裸」に対立する概念と *naked* に対立する概念とは必ずしも同じではない。日本語で「裸」と対照されるのは、普通に衣服を身に着けている状態である。特に、上半身が衣服をまとっているかどうかが問題になる。他方、英語の *naked* と対照されるのは、単に通常衣服を身に着けているというだけでなく、そのときどきに応じて十分といえるだけの衣服や覆うものが備わっている状態である。



本節では、状態が変化する状況で成立するメタファーを考察し、その一つの特徴として、状態が正常でない特別なもの、つまり「有標 (marked)」なものであることを論じた。次の節では、位置変化つまり移動を表す表現に伴うメタファーを考察する。

## 2. 位置変化のメタファー

本節でも、斎藤 (1983) で議論された「横」の例から始めたい。

- (11) よこしま, よこどり, よこながし, よこばい, よこみち, よこめ, よこもじ, よこやり, よこと出る, よこあい, よこいじ, よこがみやぶり, よこぎる (横道にそれる, 遊女が客の床を抜け出して他の客や情夫のところに行く), よこさま, よこす (讒す), よこずき, よこつら, よこだおし, よこれんぼ (横恋慕); 横着, 横柄, 横暴, 横領, 横行, 横死, 横奪, 横道, 横政, 横逸, 横禍, 横議, 横逆, 横虐, 横叛, 横放, 横民, 横夭, 横流

上記の例は、いずれも「横」から入ったり、横に行ったり、横の位置を取ることが悪いことと見なされることを示している。他方、「縦」を使ったメタファーはない。「有標な状態がメタファーを生む」という前節の議論が正しいとすれば、(11)のデータと「縦」を使ったメタファーがないという事実は、日本語の文化では、縦が正常、横が異常と考えられていることを示している。

このように、状態変化の場合と同様、位置変化の場合についても、有標と見なされるものがメタファーを生む。本節では、(11)以外の例を用いて、有標性とメタファーの関係を考察したい。

「～に走る」は、(12a)の例が示すように本来は位置変化を表すが、(12b)のようなメタファーが可能である。<sup>5</sup>

<sup>5</sup>「走る」は行為動詞であり「持ち場に走る」に比べると「駅に走る」は容認度が下がる。「駅まで走る」あるいは「駅に走って行く」としなければ位置変化の意味は成立しない。しかしながら、ここでの議論を簡潔にするため、(12a)の例を位置変化として使うことにする。

- (12) a. 彼らはそれぞれの持ち場に走った。  
 b. {悪 / 非行 / 犯罪 / 不倫 / 人員削減 / とんでもない行動} に走る

(12b)におけるような「走る」の意味を「広辞苑」は「ある方向に強くかたむく、急速に、または一瞬その状態が発現する」と定義しているが、その「方向」は(12b)の例が示す通り望ましくないことが多い。そのような意味になるのは、「走る」時は何かを避け「逃げる」非常時だからであろう。歩いて移動するのが普通の人にとって、走って移動するのは非常時であり慌てた異常な行動である。したがって(12b)のようなメタファーが生まれると言える。

英語でも run にはメタファーの用法がある。

- (13) a. As I *ran to the station*, it began to rain.  
 b. You shouldn't *run to your parents* with every little problem. (取るに足りないことでいちいち両親に助けを求めるべきではない。「ランダムハウス英和大辞典」)  
 c. Her tastes *run to sweets*. (彼女は甘いものに目がない。 *ibid.*)  
 d. She *ran to fat* in her middle age. (彼女は中年太りした。Wiktionary <<https://en.wiktionary.org/>>)

(13a)が示すとおり、文字通り位置変化の意味がある一方、(13b)～(13d)のようなメタファーの用法がある。ここでも有標性がメタファー成立に関与していると言える。(13b)は、留まって自力で何とかすべき状況で、ついにすぐ親のところ走り頼ってしまうという、普通でない行動を諷めている。また、(13c)も、ついに甘いものに目が行ってしまふ極端な嗜好の傾向に言及している。(13d)は文字通りには「脂肪に走る」であり、体重の急な増加という正常でない変化を表すメタファーである。runのメタファーは、「走る」のメタファー(12b)におけるように対象が好ましくないネガティブなものとは限らないが、普通ではない、正常ではない、つまり有標なものに向かう状況を run を用いて表しているのは明らかである。

run には、次のような位置変化の場合もある。

- (14) a. Children ran out of their classroom in terror. (子どもたちは恐怖で教室から外に飛び出した。「英辞郎」<<https://eowp.alc.co.jp/>>)  
b. I ran out of {gas / money}. ( {ガソリン / 金} がなくなった。)

(14a)は、ある場所への移動を表す(13a)と対照的に、元居た場所からの移動を表している。このように、本来は位置変化の起点を表す句 out of their classroom の位置に、out of {gas / money} という抽象的な起点を表す句を代入した(14b)はメタファーであると言える。

run には、次のような状態変化の意味用法もある。

- (15) a. The police suspect the girl *ran into trouble* at the parking lot after becoming separated from her mother. (警察は母親とはぐれた女兒が駐車場でトラブルに巻き込まれた可能性があると考えている。「英辞郎」<<https://eowp.alc.co.jp/>>)  
b. The company is *running short of funds*. (「英辞郎」<<https://eowp.alc.co.jp/>>)

(15a)は困った状態という平常でない状態への変化を表している。(15b)は資金不足という困った状態への変化を表すメタファーである。(13), (14)で見たように、本来の位置変化の意味でもメタファーによる意味拡張が可能な run を、さらに状態変化にも適用したメタファーによるさらなる意味拡張と考えてよいであろう。

位置変化のメタファーのもう一つの例として「落ちる」を見よう。

- (16) a. 彼は落ちるところまで落ちた。  
b. 2年生になって文法が始まった途端、彼は落ちこぼれた。  
c. 急に列車のスピードが落ちた。

- d. その日私たちは駅で落ち合った。
- e. 彼はすぐに深い眠りに落ちた。

「走る」の場合と異なり、「落ちる」は場所の指定がなくても位置変化を表し、本来は高い所から低い所への移動を表す。(16)は、それぞれ落ちるものの抽象度の程度は異なるものの、物理的な位置変化を表すわけではないからメタファーと考えるとよいであろう。ここでもメタファーに有標性がかかっているとと言える。「落ちる」は、一定の正常な高さや程度を保てない異常な状況に陥る(落ち入る)状況を表すからである。

この「落ちる」のイメージは英語の fall や drop と共通するところが少なくない。(16a)は墮落した人のことを言っているが、a *fallen* angel (墮天使) のような表現が英語にもある。(16b)も次のように fall を使って表すことができる。

- (17) He *fell* behind as soon as the class started studying grammar in the second year. (「英辞郎」 <<https://eowp.alc.co.jp/>>)

「落ちこぼれ (た人)」に近い表現に dropout があるが、これは勉強について行けない生徒・学生というより特に中途退学者、あるいはレースにおける脱落者を指す。<sup>6</sup> fallout という語もあり「仕事や活動を放棄した人」という dropout に近い意味があるが、次の例におけるように「悪影響」を表すこともある。

- (18) Grundy lost his job in the *fallout* from the incident. (COBUILD)

(18)の fallout は「予期しない否定的な帰結」を表すが、これも「落ちる」に伴う突然訪れる異変のイメージが活きたメタファーの用法と言える。(16c)のように「スピードが落ちる」は slow down を使うことが多いが、down は「落ちる」と同じ発想の表現であると言える。(16d)のように、どこかに行って人に会う

<sup>6</sup>「脱落者」においても「落ちる」がメタファーとして用いられている。

ことを表す意味は fall にはないが、次の例のように drop を用いた表現がある。

- (19) a. *Drop in* on us if you happen to come this way.  
 b. I *dropped in* at a bookstore on my way back from school.

「落ち合う」が約束の上で人に会うのに対し、drop in は予告なしにひょっこり訪れるときに用いる違いがあるものの、どこかに行くことを「落ちる」イメージを伴う動詞を用いて表している点では共通しており、どちらもメタファーであると言える。

(16e)における「落ちる」は位置変化ではなく状態変化に転じているが、英語にも *fall asleep* のように同じ発想のメタファーがある。位置変化から状態変化への意味拡張は run の例(15)においても同様であった。これも、起きて活動しているのが普通の動物が眠った特別な状態、つまり有標の状態に変化するプロセスで生じるメタファーと言える。

本節では、位置変化つまり移動を表す「～に走る」と「落ちる」の例を用いてメタファーに伴う特徴を考察した。その結果、1節で論じた状態変化の場合と同様、位置変化つまり移動を出発点とするメタファーの場合も、困った状況、正常でない特別な状態、つまり有標の状態に移行する場合であることを論じた。次の節では、位置変化を伴わない「行為」を起源とするメタファーの例を考察する。

### 3. 行為のメタファー

純粹な行為を表す文の代表は、人が体の一部を使って行い、体自体の移動を伴わないものである。口を使って行われる飲み食い、言語活動のほか、感覚器官を使って行われるものが典型例である。本節では、目で行われる行為の例に注目して考察する。

- (20) a. 前を見る、先を見る、先見 (の明)、先を見越す  
 b. 後ろを見る、顧 (り) みる

- c. 中を見る、中を覗く、中を窺う
- d. 上を見る、見上げる
- e. 下を見る、見下ろす、見下す、見下げる

人はふだん前を見ているのであるから、(20a)の「前を見る」は普通でありメタファーにならない。<sup>7</sup> 他方、実際には見えない「先」たとえば「1年先を見る」のは「1年後を予測する」の意味のメタファーになるし、名詞形「先見」もメタファーになる。さらに、普通に見える以上の「先を見越す」もメタファーになる。逆に(20b)の場合、メタファーは「顧(り)みる」という特別な語が担当し、「後ろを見る」は文字通りの意味だけを分担している。(20c)の場合も「見る」や「覗く」は文字通りの意味だけ担当し、メタファーの意味は「窺う」という特別な動詞が受け持つ。本来「覗いて様子を探る」意味の「窺う」には、「時期の到来を待つ、見て察知する、手がかりを求めて調べる」(「広辞苑」)といったメタファーの意味用法がある。「中を窺う」で「中を調べる」の意味になるのは、後述する英語の look into (something) やラテン語起源の英語 inspect に見られるのと同じメタファーである。(20d)の「上を見る」は文字通りの意味だけだが、「見上げる」になると「人物・力量を称賛する」というメタファーがある。これも後述する英語の look up to (somebody) と同じ発想であるが、ラテン語起源の英語 respect は元々「後ろを見る」の意味であり発想が異なる。(20e)の場合も「下を見る」は文字通りの意味だけであるが、「見下す」や「見下げる」には「侮る、蔑む」の意味のメタファーがある。これも英語の look down on (somebody) やラテン語発の英語 despise (下を見る、悪く見る) と同じ発想である。

次に英語の場合を見よう。

<sup>7</sup> 「前向き(な姿勢)」になるとメタファーになる。「前向き」は「前を見る」場合とは異なり、普通の正常な向きというものがない。「後ろ向き」と対を成し、そのどちらの選択もメタファーになる。これも有標性によって説明できるメタファーの部類に入ると思われるが、詳細は今後の課題とする。

- (21) a. look forward 前を見る 待ち望む cf. prospect  
 b. look back on 振り返る 回顧する cf. retrospect  
 c. look into 中を覗く 調べる cf. inspect  
 d. look up to 見上げる 尊敬する cf. respect  
 e. look down on 見下ろす 見下す cf. despise

(21a)の look forward (前を見る)には「期待する、待ち望む」というメタファーがある。元々は同じ「前を見る」の意味のラテン語起源の prospect には、動詞では「調べる」、名詞なら「見込み、見通し」というメタファーとしての意味しかない。(21b)の look back on には文字通り「後ろを振り返る」の意味と「回顧する」というメタファーの意味があるが、元々「後ろを見る」の意味のラテン語起源の語 retrospect には「回顧する」というメタファーの意味しかない。(21c)の look into (something) には、「～の中を覗く」という文字通りの意味と、「調べる」というメタファーによって生じた意味があるが、元々「中を見る」というラテン語起源の英語 inspect には「調べる」の意味しかない。(21d)の look up to (somebody) は、文字通りには「見上げる」の意味であるが「尊敬する」というメタファーがある。これに対応するラテン語発の語 respect では文字通り「振り返る」の意味は失われ、「尊敬する」というメタファーの意味だけが残った。最後に(21e)の look down on (somebody) は、元々「見下ろす」意味であるが「見下す」というメタファーが成立している。対応するラテン語起源の despise は元来「見下ろす」の意味であるが、英語では「見下す」というメタファーの意味だけである。

このように、本来の英語は文字通りの意味とメタファーによって拡張した比喩的、抽象的意味の両方を持つのに対し、ラテン語あるいはフランス語から入った「外来語」としての英語には文字通りの意味がなく、メタファーによって成立した抽象的な意味だけが残ったと考えられる。これは、外来語は限られた特定の意味だけで用いられるという一般原則の一つとして捉えられる。<sup>8</sup> 特にメ

<sup>8</sup> 日本語に入った数多く存在する外来語も、特定の意味だけで用いられる。英語の strike

タファーによる意味拡張を伴う語の場合、外来語の元の意味が伝わらないため、メタファー成立に欠かせないイメージも伝わらず、メタファーによって成立した結果としての意味だけが伝わるためと考えることができるであろう。

#### 4. 終わりに

本稿では、メタファーが成立する要因として、斎藤（1983）で提案された「有標性」(markedness) がかかわっていることを、状態変化と位置変化と行為という三つの意味領域に分けて考察した。結論として、いずれの領域においても、通常の場合とは異なる有標な状況に移行する際にメタファーが生まれると言えよう。さらに、外国語を取り入れる際、元の言語において存在する本来の意味とイメージが伝わらず、メタファーによって派生した抽象的な意味だけが伝わることを示唆した。

### 参考文献

- 藤本滋之（1990）「裸」の言語文化論、「筑波英学展望」9: 61-66.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- 斎藤武生（1983）「言語文化学事始」開拓社、東京
- Sweetser, Eve (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*, Cambridge University Press, Cambridge.

---

から入ったストライキは労働者（あるいは学生）が打つもの、ストライクは野球あるいはボウリングで使われる特別な意味の語である。フランス語に入った日本語「着物」は、初めは「柔道着」だけの意味で用いられた（Jean-Luc Azra 教授個人談話）。



